

3. 江戸時代の土橋北遺跡について

土橋北遺跡では、現在の市道の下から江戸時代より続く三国街道の跡が見つかり、道路両側に側溝を持っていることが明らかになりました。この側溝から出土した陶磁器の製作年代から、三国街道が利用された年代が分かります。側溝は大きく2回切り換えが行われており、約350年前に行われた後は大きく変化することはなかったようです。

370年前に新発田藩が作成した阿賀野市周辺の絵図によると、三国街道も確認できます。絵図中では分田-水原間には安野川の流れが表現されており、安野川の南側には「も、寸新田」（百津新田）の表記が認められます。これは、絵図に「百津」の名が初めて登場する事例で、以後、百津村の名が絵図や文書資料に登場するようになります。三国街道の西側には阿賀野川の流れが本流と切り離され渦化した百津渦が存在しており、約400～300年前に新田開発によって干拓されたと考えられます。

発掘調査の成果からは、400年前には土橋北遺跡に集落が成立していることから、絵図の「も、寸新田」は百津渦周辺の新田開発を行った人々によって築かれた集落を表していると考えられます。発掘調査で発見された建物群は、三国街道沿いに建てられていたことが明らかになりました。中でも、街道に面した建物は最も規模が大きく、街道の往来と密接な関係にあることが伺えます。これらの建物群は周辺の新田開発を進めた後、遅くとも250年前には失われたと考えられます。江戸時代の前半期において、主要道として三国街道が整備され、その切り換えに合わせて百津村の形が変化し、現在の百津町へと移り変わってゆく過程を知ることのできる点で、貴重な事例であるといえます。

4. 出土遺物

三国街道の道路側溝や建物跡からは、約400～350年前を中心とする焼き物が出土しています。主体となるのは九州で焼かれた有田焼です。中国の景德鎮窯で生産された皿も1点出土しており、当時の百津村が舶来品を購入し得る経済的に豊かな状態であった可能性も考えられます。この他、富山県で製作された越中瀬戸焼の挿鉢も含まれていました。時期が下った幕末頃には、瀬戸美濃・石見・高取といった色々な産地の焼き物が含まれるようになり、会津で作られた焼き物の流通も確認できました。阿賀野川を通じて会津地方と交流の深かった阿賀野市ならではのと考えられます。

5. まとめ

近年の道路交通状況に関しては、上空から撮影した写真や正確な地図が手軽に手に入りますが、江戸時代の交通状況を調べる際には、絵図や文書資料といった資料に頼る他ありません。しかも、江戸時代が始まってから半世紀近く経過した正保年間よりさかのぼることは困難です。しかしながら、三国街道は江戸に通ずる主要道であり、江戸時代後期には土橋北遺跡より程近い阿賀野市街に水原代官所が建設され周囲が幕府領となるなど、遺跡周辺が交通の要所であったことは重視すべきです。本遺跡のような発掘調査の積み重ねによって、絵図や文書資料では分からない詳細な地域社会の歴史が明らかになることが期待されます。

参考文献

古澤 2011 『水原代官所跡発掘調査概要報告書』
新発田古地図等刊行会 1976 『正保四年 新発田領絵図』



370年前の絵図（新発田領絵図）



出土遺物（江戸時代の焼き物）

平成29年度 どばしきた 土橋北遺跡 発掘調査だより

平成 29 年 5 月 2 日

阿賀野市 生涯学習課

株式会社 帆 莉 組

1. はじめに

阿賀野市の由来となった阿賀野川は、市の南西部で大きくカーブしながら日本海に向け流れています。阿賀野川は江戸時代以降 100 回を超える洪水が起きており、度々その流れは大きく変わってきました。現在でも平野部には、かつて阿賀野川が流れていた名残が色濃く地形に残されています。

土橋北遺跡は、平成 26 年度より県営湛水防除事業に伴い発掘調査が進められています。この遺跡は市街地の端にあたる阿賀野市百津に位置し、周囲には田園風景が広がっています。改修工事が行われている安野川を挟んで北側には百津町があり、古くから三国街道が整備され、百津渦の脇を通り分田-水原間を繋ぐ主要道として人々の往来を支えていました。

2. 発掘調査の概要

今年度は4月より遺跡の東側部分にあたるC区の調査を開始しました。昨年度までの調査で10層に及ぶ地層が堆積することが明らかになっています。現地表面からI～III層までは現代の耕作土で、IV層では江戸時代（約400年前）の集落跡（三国街道、建物、井戸、溝）が見つっています。深く掘り進めたV層からは縄文時代晩期（約2,500年前）、VII層からは縄文時代後期（約3,500年前）の土器が出土しています。

今年度も、まずIV層で江戸時代の集落跡を調査するところから始まりました。昨年度までに13棟の建物が見つかりましたが、今年度は新たに建物跡1棟（建物14）と溝を1条（C28）発見しました。建物14より東では同時期の建物跡が見つからず、今回は江戸時代前期の集落の東端が明らかとなりました。また、建物14とC28の間には大きな埋め立て土の堆積（攪乱）が認められました。地元の方に話を伺ったところ、昭和42年の羽越水害の際、周囲の田畑に湛水した雨水を安野川に流すため破堤させた場所であることが分かりました。

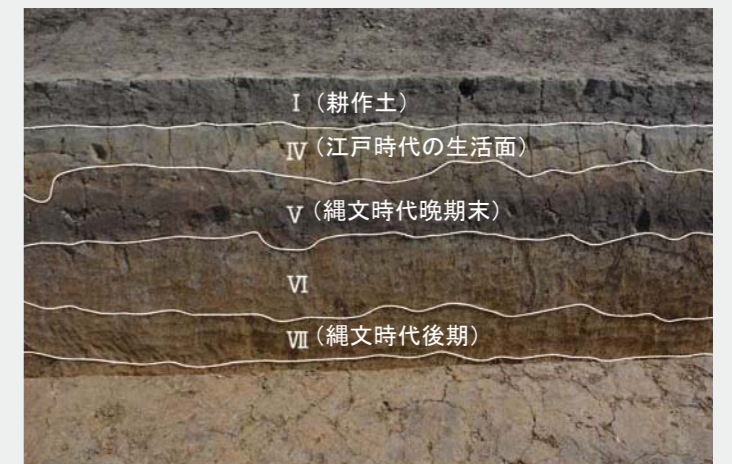
現在、発掘調査はV層上面まで掘り下げ縄文時代晩期の生活面を調べています。



土橋北遺跡の位置（古澤 2011 に加筆）



調査範囲（国土地理院 昭和23年米軍空撮）



C区南壁 基本土層（南から）

土橋北遺跡（A区・B区・C区）

< 遺構平面全体図 >



遺跡全景（西から）



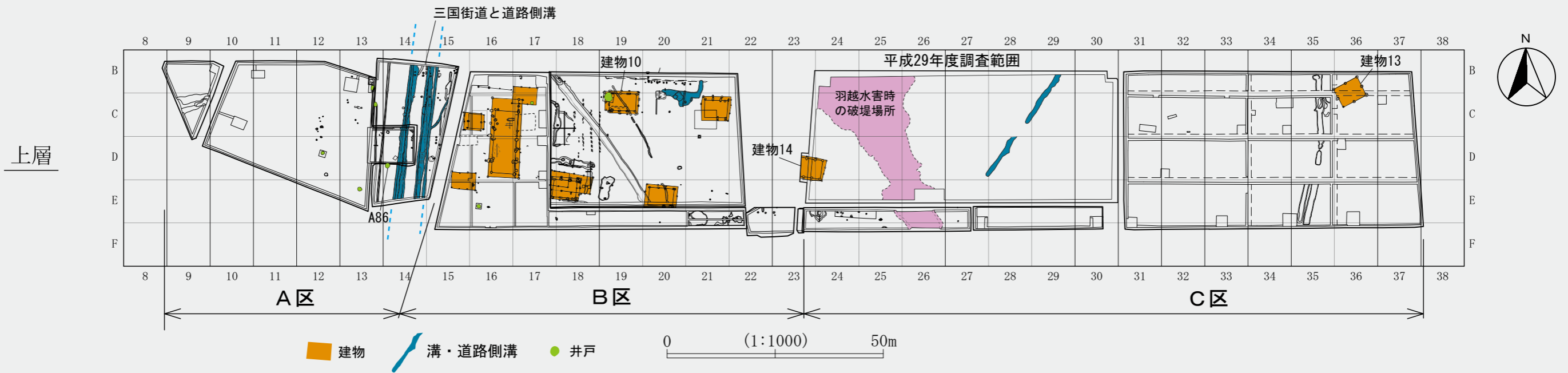
A区（南西から）



B区（平成27年度調査範囲 南から）



C区（本年度調査）全景（西から）



A区 井戸A86 断面写真（南から）



B区 建物10（東から）



C区 建物14（東から）



C区 建物13（南西から）